

朝日新聞

元氣東海

NEWS

ニュースクリップ

CLIP

コチヨウラン



愛知県豊橋市は国内有数のコチヨウランの産地。07年度全国花き島野会伴らん部門で豊橋水産大附属を受賞した尾崎幹雄さん(50)の会社「リーフ」のハウスを訪ねた。気温35度を超える猛暑日だったが、コチヨウランはエアコンが利いたハウスで、柔らかな日差しを浴びて育てられていた。

コチヨウランは、発芽から一週間は台湾などで栽培された後、日本に輸出する「国産分業」が主流だ。08年ごろから定着した。原産地でもあり、株の

演出の細心 分業たまたま

生育に適した気候の台湾で育てると、日本よりも開花と開花短縮ができる。いかにきれいに、大きく、多くの花を咲かせ、見栄えよく仕立てられるかが、日本での競り合いの鍵だ。

輸入関係のない株の葉は約20センチ、夜18度の室温に保たれたハウスで、1株ずつポットに入れて育てる。水と光、肥料のバランスを、成長段階と季節に合わせて微妙に調整する。尾崎さんは、コチヨウラン栽培を始めて今年で11年目。半数の株を数日にしたこともあった。ポットで育った株を、女性従業員が20株をまとめて直販60センチの鉢に寄せ植えしていた。20本の花が同じ方向に流れるように茎を支柱とめていく。年間の出荷数は24万株。東京向けが最

も多く、全体の4割を占める。豊橋市での栽培は、地元・時習館高校農産科を04年に卒業した3人が始めた。そのうちの1人で、今も生産する長坂雄江さん(62)によると、卒業して数年後、フランスに入った苗を買って育てると、全国から注文が舞い込んだ。70年ごろ、うわさを聞きつけた大阪の花屋から「結晶式用に切り花ではない」と注文が入り、花1輪100円で売った。「罫式で使いたい」と大阪から豊橋まで新幹線で花を取りに来たこともあった。さらに研修に来る人もいて、生産技術が各地に広まっていった。

現在、同市のコチヨウラン生産農家は8戸。設備投資に積極的で、先進技術を採り入れてきた。尾崎さんの実家はトマト農家だったが、コチヨウランにひかれて反対を押し切って生産を始めた。尾崎さんのように新規参入者もいれば、長坂さんは後継者となる2代目を育てる。愛知県東三河農林水産事務所の柴田幸典さん(50)は「全国的に産地が特化されてきている。豊橋市内の農家は経営的に重宝されているので、今後も安定供給が期待できる」と話す。

花に対する消費者の好みは多様化が進み、コチヨウランも、一時より単価が下がった。尾崎さんは「高級品と思われがちだがコチヨウランを身近な存在に」とネットショップ「はなやちか」を立ち上げ、市価より割安で直売する。産地は、販路の多様化にも向き合い始めている。

山口重雄子

メモ 愛知県の花生産は、2位の福岡を大きく上回って全国一。コチヨウランの県内の主産地は、豊橋市、西尾市、安城市、碧南市。県によると、08年度の県内産出額は21億9700万円。作付け延べ面積は1713㊦、出荷数量132万鉢。

尾崎さんに家庭での栽培方法を教えてもらった。温度は18～25度、湿度は40%以上。冬は乾燥に気をつける。光は間接的に日光が当たるのがいい。水やりは季節ごとに違い、夏や秋は10日に1回たっぷりやる。冬は20日に1回。咲き終わっても花芽は切らない方がいいという。「株さえ生きていれば、1年のうちどこかで咲くからあきらめないでください」と尾崎さん。



●花が見栄えがするように株をポットから鉢に植え替えて形を整える

●台湾から輸入され、花芽が伸びてきた株。1本に約18輪の花が付く「リーフ」で



聞き取り 編集部

□「[NANA]」の「尾崎さん」。いろいろ話が最初に行きつた。「そんなもので」という批判が出そうですが、こういう機械を作るのも職人なんですよね。日本人はすごい。

(愛知県刈谷市 45歳男性)

□「街道新話」の「名古屋高速・大高」。大高には日本の数々が押し込まれている」といっての一行にうなずかれました。

(三重県桑名市 80歳女性)

□「下から高速道路を見上げることはまったくありません。尾崎さん、尾崎さんという空をよぶことができた感じがしますね。」

(岐阜県恵那市 38歳女性)



動画は、コチヨウランの録作りを撮影しました。24日まで配信。「iPhone」は、http://asahi-nagoya.com/iphから見られます。

作・造・創